

# 青年海外協力隊員レポート

平成13年7月から青年海外協力隊員の保育士として、エジプトで活躍されていた前田房美さんが2年間の派遣期間を終え、8月に帰国されました。  
派遣国での体験や感想をご紹介します。

エジプト・レポート①

前田 房美（北川原）

## 世界はひとつ みんな仲間

青年海外協力隊。20歳から39歳までの若者が年間約1,500名、世界へ旅立ち、異国・異文化の中で2年間という月日をささげ、現地の人たちと現地の言葉で話をし、ともに生活を送っています。

派遣前には日本国内で、約3か月、語学を中心に文化・生活・歴史・医療などについて集団生活を送りながら訓練を受け、派遣されることとなります。そこには全国からさまざまな年齢・職業の人たちが集い、友人も大勢できました。そして、その同期の友人は世界へ羽ばたき、時を同じくして異国・異文化の中で生活を送り、そこでもさらに多くの友人ができたことでしょう。「友達の友達はみな友達」そんな原則を思えば、今私は世界中に友人がいることにな

ります。まさに世界はひとつ。みんな仲間。そう思えることもうれしく、不思議な気分になります。今回はそんな友人の一人を紹介したいと思います。

彼女の名前はアマル。彼女は5人の姉妹・2人の弟をもつ7人兄弟の次女です。大学を出て、さらにコンピューターの学校で資格をとり、今は電話局へ就職し、忙しい日々を送っています。そして彼女もまた例に漏れず、敬虔なイスラム教徒です。生まれがイスラム教の家庭だからという環境に甘んじることなく、みずからさまざまな宗教を学び、理解したうえで、みずからイスラム教の教えに生きると心に決めた彼女。私にとって未知なるイスラム教への疑問も、丁寧に教えてくれる「アマル



▲活動先の先生たちと子どもたち

先生」でもありました。

イスラム教といえど1日5回のお祈り。しかしながらエジプトに行くまで、いや、彼女と会うまで、「1日5回も？面倒くさくてさぼっちゃったりしてんでしょ。」と軽く考えていました。しかし、彼女は言います。「毎日アッラー（イスラム教徒の信仰する全知全能にして唯一の神）に祈っている時、とても気持ちがいいのよ。悩んでることがあっても、イライラしちゃうことがあってもお祈りすると、あ、私がいけなかったんだって思えるし、落ち込んでるときも元気が出てくるの。だからお祈りしてる時間が一番すきな。」そしてどんなに暑くても人前（男性の前）ではスカーフで髪をかくし、長袖の服を

着て肌を隠して生活している女性たち。敬虔な人になれば、さらに手袋をし、顔も目だけを残して覆ってしまうのですが、これも「肌や髪の毛を見せるのは愛する人の前だけよ。素敵でしょ。」と笑顔で答える彼女。あるときには、「日本ではね、子どもが親を傷つける事件がおこったりするんだよ。」という話をすると、とても悲しげな表情で「信じられない…。コーラン（イスラム教の聖典）



▶犠牲祭明けの日は、みんなで早朝に近所のモスクに集まって祈ります。（特別な日です）  
男性ゾーンと女性ゾーンに分かれています。みんなで集まって祈るのは年2回くらいだけです。（日本の初もうでに似ている…!）



▲黒砂漠です

にはね、どうやって親孝行すればいいかってこともちゃんと書いてあるのよ。たとえばね、結婚して家を離れたとしても、近くにすんで頻繁に会いに行つて、お茶を飲みながら一緒にすごして話を聞いてあげるといふことだけでも、とっても大事なことなんだよ。」と彼女は言います。

彼女に限らず、公共の乗り物に乗れば、若い青年が当たり前にお年寄りに席をゆすり、大きな荷物を持っている人がいれば手を差し出す。そんなあたり前のやさしさが残っているエジプト・イスラム教徒たち。